戦後ポーランドにおけるコンビナート建設と都市形成

—— カトリック教会と労働者 ——

加 藤 久 子

(一橋大学大学院社会学研究科博士課程)

Establishment of a Metallurgical Complex and the Formation of a City under the Communist Regime in Poland: People as Christians and/or Labourers

KATO, Hisako

Postgraduate Student, Hitotsubashi University

Abstract

After World War II the Polish government planned to reconstruct the infrastructure and accelerate industrialization and urbanization. In 1949, the Communist Party declared that they built a metallurgical complex “Nowa Huta” on the outskirts of Krakow as the main project of a 6-year plan. It was not only a symbol of industrialization and modernization, but also of a drastic transformation of Poland in every field of social life in accordance with Socialist ideology. The Communist Party thought of it as the first socialist city in Poland and propagated it like as a utopia of labours. It organized a lot of young peasants, who had neither land to plow nor work in their hometowns, to migrate to Nowa Huta. They surged into this “modern” city.

The peasants, however, were mainly motivated by money-making rather than by the ideology: “struggle against the class enemy” and so on. In the early years of Nowa Huta, most young people regularly went to church with pleasure, and many of them participated in the organization of “Służba Polsce” (Service to Poland). There was no ideological consistency. People sometimes behaved as young labourers or stylish town dwellers, and at other times lived as traditional peasants or devout Christians. In addition to pursuing pleasure and their own interests, they embodied different kinds of ideologies and ideals at the same time.

Life in Nowa Huta was not easy because of a lack of houses and a disordered social environment. A priest described the situation as chaotic, confused, and lawless. The party started to attack the church and banned the construction of a parish and any new parish churches. Inhabitants could not have their own parish church. Why would they keep religious practices and faith under these conditions? And how?

One of influential factor was catechism. Even parents who had not been to church regularly made their children prepare for their first Communion. Few people refused

Keywords: Democratization, Social Change, Catholic Church

it. In Poland, the customs, the manner of behaviours, and the calendar are closely related to Catholicism. The church, families, and the local society consisted in religious ceremonies and annual events. These practices depending on the family and the small community strongly connected the religion with their daily lives.

は じ め に

東欧の民主化という文脈において、ポーランドのカトリック教会については、「連帯」に代表される反体制運動と重ね合わせられ、市民社会の領域の問題として研究されてきた。

確かに、近年、社会主義国家の中に市民社会は存在しなかったとする旧来の見解は批判されており、社会学や人類学などの分野では、その社会の有りようについての研究が進められている⁽¹⁾。また、「市民社会」をスローガンに掲げた1970年代以降の反体制運動を手掛かりにしながら、旧来の西欧型「市民社会」概念と対照し、新たな「市民社会」像を構築する試みも行われている⁽²⁾。しかし、教会がそのような文脈に配置される時、聖職者による体制を批判する発言や諸活動に着目されることが多く、ややもすれば「党権力と戦う教会」「市民を守る教会」というような価値論的な評価が行われてしまうという問題を抱えてきた。また、往々にして反体制運動が市民社会とイコールで結び付けられることによって、社会の中の諸個人は、市民社会＝反体制運動への参加者として語られてしまうか、あるいは、議論の表面からは姿を消してしまうという問題も抱えている。

このような問題を乗り越えるため、M. ブホフスキは、M. フーコーを参照しながら、市民社会という語の持つ両義性について説明する。そこでは、市民社会(Civil Society)は「統治の手段・技術」であると同時に、「国家権力に圧力を及ぼす手段」であり、ブホフスキは、特に、この2つの目の機能を「Civic Society」と呼ぶ⁽³⁾。従来の研究においては、教会の、この「Civic Society」としての側面のみが強調される傾向にあり、その範疇に入らない人々や諸活動については、捨象される傾向にあったと考えられる。しかし、教会が、党の一元的支配下においても相対的な自律性を保つことが出来たのは、単なる批判には留まらない独自の価値体系を持ち、それを社会の中で、まさに「自律的に」維持・発展しようとする主体であるからと言える。もちろん、この2つの性質を完全に分節化することは不可能であり、また、無意味でもある。そこでは、イデオロギーや政策と、それが実際に機能する中での相互関係などが複雑に絡み合っており、1つの現実を形成していると考えられる。従って、本論文では、敢えて両主体の直接的な対立に焦点をあてることを避け、諸個人の集積であるところの社会に向けて、党と教会、それぞれの側から、どのようなイデオロギーが投げかけられ、社会が、どのような反応を引き起こしたかという視点から分析を行いたい。

党国家が「国民」として忠誠を求める諸個人は、教会が「信徒」と呼びかける諸個人でもあり、さらに、後には「反体制運動」が「同志」として連帯を呼び掛けた諸個人でもある、とい

⁽¹⁾ 市民社会概念に着目したカトリック教会研究の動向については、拙稿「社会主義政権下ポーランドにおけるカトリック教会——『三月事件』(1968年)に対する教会の見解に着目して——」『宗教と社会』第10号、2004年、71-92ページ、にて論じている。

⁽²⁾ 一例として、Kaldor, Mary, *Global Civil Society*, 2003 を挙げる。

⁽³⁾ Buchowski, Michał, "The shifting meanings of civil and civic society in Poland," in Hann, Chris & Elizabeth Dunn, eds., *Civil Society*, London & New York: Routledge, 1996, pp. 79-98.

う点は、社会主義政権下ポーランドにおける社会の在りようを決定付けた。本稿では、そのような、党とカトリック教会のイデオロギーが交差する場所として、党が自らのイデオロギーの現前として称揚し、社会主義ポーランド「成功」の象徴として謳われたノヴァ・フタ（Nowa Huta）の冶金コンビナートを取り上げ、その地域社会に着目しながら、社会主義ポーランドにおけるカトリック教会の機能について考察する。

1 ノヴァ・フタをめぐる問題設定

クラクフ市ノヴァ・フタ地区（現在）は、ソ連のマグニトゴルスク（Magnitogorsk）と並び、社会主義者によってゼロから計画・建設された都市と言われている。シロンスク地方などと比べて交通や原料供給の便が悪く、戦前からの重工業の基盤が極めて貧弱であったクラクフに⁽⁴⁾、このような鉱工業コンビナートが建設された理由については、現在、鉱工業中央管理局（Centralny Zarząd Przemysłu Hutniczego）の資料などにに基づき、検証が進められている。

そこから明らかになる1つの特徴として、強い政治性・イデオロギー性を挙げることが出来る。そもそも、一般名詞としてのノヴァ・フタ、つまり「新しい製鉄所」の建設は、1947年5月17日に正式に決定されたものであるが、1945年から産業化政策の中核をなすものとして企画されていたと言われ⁽⁵⁾、1949年に発表された六カ年計画の中核をなすものであった。従って、特にスターリン期においては、全国紙にも毎日のようにノヴァ・フタを賞賛する記事が掲載され、成功した社会主義のモデル・ケースとして称揚された。そのようなプロパガンダにおいて、ノヴァ・フタは、スターリンによって謳われた産業発展の一方で均等な配置を体现するものと意義付けられている⁽⁶⁾。一方、1980年頃から反体制活動を通じて、ノヴァ・フタは、保守的な古都クラクフへの懲罰として建設されたという説明が現れ、公害や、後の経営の行き詰まり、それに伴う社会環境の悪化などまでもが、その「懲罰」の一例として指摘される傾向になる⁽⁷⁾。

いずれにせよ、多分にイデオロギー的な評価ではあるが、このようなイデオロギー的言説の中で翻弄される存在であるということも、ノヴァ・フタの歴史を特徴づけていると言える。現在、J.サルヴィンスキのように、「経済的動機」を中心に語るのはマルクス主義の教科書的な回答であり、「政治的動機」に力点を置くのは、後の反体制勢力によって意味づけられたものだと言明し、そのようなステレオタイプを打ち破る事例を挙げながら、包括的な理解への糸口を探る研究も出てきている⁽⁸⁾。また、結果として、戦後の混乱や近代化の進展の過程で、溢れ

⁽⁴⁾ 第二次大戦直後、地方紙にクラクフ県の産業に関して、「我々は、クラクフ県の鉱山冶金産業を、占領者の手から、ほとんど破壊されない状況で受け取った。ソ連軍の素早い活動のおかげで、ドイツは、厳密な撤収を行う余裕がなかったのである。（……）通信・交通の条件が整い次第、クラクフ県の鉱山冶金工場は、経済上の自らの価値を完全に回復することは疑いない」というプロパガンダが掲載されるが、そこで挙げられる鉱山や製鉄所は、ほとんどすべてがシロンスク県（当時）に属するものであった。[Dziennik Polski, 30 marca 1945]

⁽⁵⁾ Chwałba, Andrzej, *Dzieje Krakowa. tom. 6*, Kraków: Wydawnictwo Literackie, 2004, p. 206.

⁽⁶⁾ 製鉄所の建設を初めて一般に報じた際のJ.ツィランキエヴィチの演説より。[Dziennik Polski, 29 czerwca 1949]

⁽⁷⁾ Janus, Bolesław, “Labor’s Paradise: Family, Work, and Home in Nowa Huta, Poland, 1950–1960,” *East European Quarterly*, XXXIII, No. 4, January, 2000 pp. 453–454.

⁽⁸⁾ Salwiński, Jacek, “Decyzje o lokalizacji Nowej Huty pod Krakowem,” Małeck, Jan M., *Narodziny Nowej Huty*, Kraków 1999, pp. 77–94.

出た農村の余剰人口を吸収する場所として機能し、特に、貧農の生活レベル向上の一助となったことは指摘できるだろう。

このような背景を受け、ノヴァ・フタにおいては、都市設計の段階では、当然、教会の建設は予定されていなかった。しかし、実際に都市の建設が開始され、人口流入が始まると、新住民の間で新しい教会の建設が求められるようになった⁽⁹⁾。従来の研究では、ノヴァ・フタにおける教会建設要求については、G. ケペルらによって、市民社会における「下からの再キリスト教化組織」としての「教会建設運動」、そして、それが路上での闘争という形を取って現れた1960年の「ノヴァ・フタ事件」に焦点をあてながら紹介されて来た⁽¹⁰⁾。しかし、1949年にノヴァ・フタの建設が始まってから、1967年の教会堂建設の着工までの間、そのような「運動」「事件」という形を取って、この要求が社会の表面に現れたのは限られた時期である。それ以外の時間には、住民は、国民として、労働者として、カトリック信徒として、また、その他、例えば、家族や共同体において期待される父親像・隣人像など、さまざまな価値や規範を混在させながら、独自の生活空間を形成していたと言える。激しい対立（「事件」や政治的闘争）が、そのような日常性から発生した「非日常」であるならば、そのような「非日常」を生み出した背景について知る必要があるだろう。

従って、本稿では、ノヴァ・フタの建設の開始（1949年）から、教会建設要求が表面化する（1956年末）までの期間に着目しながら、その社会の有りようについて見て行きたい。

2 ノヴァ・フタ住民——労働者として・信徒として——

(1) 人口学的特徴

阪東宏の研究に依拠すれば、20世紀初頭のガリツィア地方における労働者人口は19.4万人（総住民の2.4%）であり、その内大部分が手工業労働者で、工場制工業労働者は8.7万人に過ぎない。日雇い労働者や公務における労働者（官庁、衛生、教育）を加えても32.2万人（総住民の4%）程度と概算されている⁽¹¹⁾。もちろん、独立後の産業発展や戦争の影響（国外への労働者としての移住、外国資本の流入、軍需産業への動員など）を考えれば、戦間期・戦中を通じて、日雇い労働や季節労働は増加したはずであるが、クラクフにおいて、労働者という社会階層は未発達のみであったと言って良い。

A. ストヤクの1967年の報告によれば、ノヴァ・フタの「労働者⁽¹²⁾」の出身地は41.7%がクラクフ県内であり（その6割がクラクフ市外）、以下、キェルツェ、カトヴィツェ、ジェシェフなど、近隣各県がそれぞれ11-17%とされる。出身階層については、自己申告によれば、労働者が25.9%、農民が71.4%である。また、年齢別に見れば35歳未満が半数で45歳以上は1割にも満たない⁽¹³⁾。このように、人口分布上の特徴としては、多くが近隣の農村地区から流

⁽⁹⁾ ノヴァ・フタにおける教会建設過程については、拙稿「社会主義ポーランドにおけるカトリック教会をめぐる報道～ノヴァ・フタでの教会建設過程に着目して～」『東欧史研究』第27号、2005年、90-103ページ、で詳述している。

⁽¹⁰⁾ ケペル、ジル『宗教の復讐』晶文社、1992年、151ページ。

⁽¹¹⁾ 阪東宏『ヨーロッパにおけるポーランド人19世紀後半——20世紀初頭』1996年、青木書店、311-313ページ。

⁽¹²⁾ 従業員（załoga）を、労働者（robotnik）、職長（mistrz）、管理職（kierownik）に分けた上で、労働者のみを対象として調査を行っている。

⁽¹³⁾ Stojak, Antoni, *Studia nad Załogą Huty Imienia Lenina*, Kraków: PAN Oddział w Krakowie Prace

入した非熟練工であり、また若い夫婦が極端に多い（前述の調査によると既婚者が85%程度）点が上げられる。初期のノヴァ・フタの住民構成についての詳細な統計は残されていないが、独身者の割合が相対的に高いことを除いては、同様の傾向を示していたと推測される。

（2）ノヴァ・フタの建設と住民の生活

ノヴァ・フタの広報編集委員会の主要メンバーであったゴワシェフスキの日記によれば、ノヴァ・フタの建設作業は1949年5月16日の鉄道敷設のための整地から始まったとされる⁽¹⁴⁾。最初の整地作業のための作業班は22人で、そのほとんどが、クラクフ市外（当時）のノヴァ・フタ建設予定地近隣の村の若者であり、「この若者たちは、その時まで田舎で仕事がなく喜んで労働に参加した」「午後に昼食が出るということや、作業の機械化が始まるということにも満足そうであった」と記録される。まだ、一般にはノヴァ・フタの建設は公表されていなかったこともあり⁽¹⁵⁾、参加者からは、特にイデオロギーの高揚感や使命感と言ったものは読み取れない。

6月23日に、シトー会の修道院があったモギワ村落（Mogiła）とプレシュフ村落（Pleszów）に労働者向けバラック建設が始まり、一般に、この日がノヴァ・フタ建設の最初の日と記述されていることが多い。しかし、ゴワシェフスキによると、それは全く地味なものであったようだ。クラクフ市の外れにある、チジィニ（Czyżyny）地区に煙草の専売公社の工場を建設していた労働者を20人ほど連れてきたとされるが、「彼らは全くパツとしない有様で、この場所に巨大な都市が出来ることになるということなど、実際、全く知らされてなかった」「十分な作業員を動員することが出来ていない」「交通の便も悪く、材料は不足し、労働者は足りない。こういうことのすべてが、労働者の間にアパシーを広げる」など問題点を書き連ね⁽¹⁶⁾、焦りの色がうかがえる。

しかし、ノヴァ・フタの建設が大々的に報じられ、7月になると、党の斡旋によりクラクフ県内の「貧しい山間部」で地元で仕事のないレンガ職人などが作業班として組織され始める。「従業員は日々増えている」と記され、作業の著しい進展や他県からの奉仕作業団の到着、託児所の建設計画を詳細な建築予定図入りで記録するなど、記述内容は大きく変貌する。このような中、工業労働者としての新しい生活スタイル、特に、定時労働・賃労働・集団作業・給食といった集団的な特徴が、創出されることとなる。徐々に、党による教育プログラム（1950年10月11日に成人向けの中等教育学校が開校）や各種クラブが企画され始め、集団的な行事への参加、さらに劇場（1952年に完成）や映画館の建設が始まり、文化・社会的活動にも言及されるようになった。

しかし、全体として、住民をめぐるノヴァ・フタの社会環境は荒廃していたと言える。工場や鉄道の建設計画の前倒しが熱狂的に報道され、劇場や映画館の建設まで計画される一方で、全国的な建材不足と人口流入の加速で住宅問題は深刻さを増していた。住宅が割り当てられない新住民は、「一時的な収容先として、まだ機械が入っていない煙草の専売公社のホールや倉庫を住居として割り当て」られる状況だった⁽¹⁷⁾。安普請の団地では1年で扉や窓の開閉が出

↗ Komisji Socjologicznej, nr. 9, 1967 pp. 12–17.

⁽¹⁴⁾ Gołaszewski, Tadeusz, *Kronika Nowej Huty*, Kraków: Wydawnictwo Literackie, 1955, p. 64.

⁽¹⁵⁾ ポーランド統一労働者党県支部での第一回評議会の終了後、6月25日に発表され、順次、各メディアに演説の全文が掲載される。

⁽¹⁶⁾ Gołaszewski, 1955, pp. 67–68.

⁽¹⁷⁾ Tamże, pp. 166–167.

来なくなったり、壁が崩れ落ちたりという問題がおこり、労働者の側でも、集合住宅の住環境に適応できないためか、建物の破壊・破損が相次ぎ、当局からも非難されるようになった⁽¹⁸⁾。後に、「ホテル」と呼ばれる集合住宅が出来、住環境のレベルは徐々に改善されていくが、人口の流入は、さらに加速度を増す。住宅不足のため住所不定・路上生活となっている従業員の問題は後々まで尾を引き、教会建設反対の最大の理由として強調された⁽¹⁹⁾。また、ノヴァ・フタ地区の党の機関紙は、創刊早々（1950年）、給与の不当な支払いについて報道し、従業員の労働意欲の低下を招いているとの事例を取り上げている⁽²⁰⁾。

ノヴァ・フタは、コンビナートの完成を前に、すでに内部に多くの欠陥や矛盾を抱え始めていた。

(3) カトリック教会をめぐる情勢

a 初期の司牧活動——モギワからノヴァ・フタへ——

1949年の建設開始当時から、ノヴァ・フタ住民の宗教的实践は、モギワ村のシトー会修道院を中心として行われた⁽²¹⁾。ノヴァ・フタの建設作業はモギワ村から開始され、また、それはノヴァ・フタで唯一の教会堂であったため（小さな聖堂は他にもあったが）、人びとは自然にそこに集まるようになった。ノヴァ・フタへ流入した新住民にとって、その場所こそが「共同体」の証であり、精神的支柱であったと言える。シトー会のカルシュニャ神父は、当時を以下のように回想する。

ごく初期にノヴァ・フタの建設に参加した若者たちは宗教的实践を自由に行うことが出来た。ポーランド奉仕団（Organizacja “Służba Polsce”）に参加している若者が、各日曜日、大変喜んで教会に通った。モギワの教会堂の端から端まで埋め尽くし、ともにミサに与った⁽²²⁾。

一方で、神父は、自らを省み、「ノヴァ・フタが出来るまで、モギワのシトー会士は司牧には直接には関心は持っていなかった」と記している。修道会の特性からすれば自然なことではあるが、環境の急激な変化に、霊的な葛藤があったことを告白している⁽²³⁾。かつてのような、外界との接触の極めて少ない「祈りと労働の生活」は様変わりし、シトー会士たちにとっても、「モギワ村」ではなく「ノヴァ・フタ」での新たな生活が始まったと言えるかもしれない。ノヴァ・フタに最初の団地が完成した1951年には、クラクフのサピエハ大司教によって、モギ

⁽¹⁸⁾ Janus, B., 2000, pp. 455–456.

⁽¹⁹⁾ 建材不足と節約を訴えるキャンペーンは、全国紙からクラクフ発行の地方紙まで、すべての新聞で見られるが、特にノヴァ・フタについて言及したものとしては、地方紙 Głos Nowej Huty 28–30 października 1957, 地区の党機関紙 Budujemy Socjalizm, 2–4 lutego 1957, 16–17 lutego 1957 などが挙げられる。

⁽²⁰⁾ 人手不足により超過勤務（休日出勤・夜勤）を強いられているが、その分の給与が正当に支払われていないという趣旨。[Budujemy Socjalizm, 1 sierpnia 1950]

⁽²¹⁾ 1951年までは、正式には、シトー会の向かいに建つ、1466年に建築された木造教会（聖バルトウォミェイ教会）を小教区教会としていた [Kołodziejczyk, Iwo, *Mogiła opactwa cystersów*, Kraków, 1992, p. 72.]。小教区における司牧の責務は、こちらの聖バルトウォミェイ教会の司祭が負っていた。

⁽²²⁾ Karsznia, Niward St., *Życie Rodzinne w Nowej Hucie*, Kraków: Sponsor, 1997, p. 19.

⁽²³⁾ Karsznia, Niward St., *Powstanie Parafii i Budowa Kościoła Matki Bożej Częstochowskiej w Nowej Hucie*, 1994, Kraków: Sponsor, pp. 22–23.

ワ小教区はシトー会の神父らに託された。

また、さらにカルシュニア神父は、ノヴァ・フタ建設当初を振り返り、「多くの召出しがあった」と記録している。具体的な数字は記載されていないが、「十数人の少年が修練士として、数十人が神学生として、召命を受けた」とする⁽²⁴⁾。当時、モギワのシトー会は、小神学校「聖ベルナルド・コレギウム」(1952年に党により廃止された⁽²⁵⁾)と大神学校を持っており、そこでは、中世さながらの神学生らの姿が見られたと記している。

しかし、その後の、教会や信仰をめぐる状況の悪化について、カルシュニア神父は「霊的な意味ではカオス、喪失、混乱」と説明し、社会の中での連帯の断絶や物質主義を批判し、そのような状況を引き起こしたのは党の政策によるものだと批判する。

次の時期には、このような種類の活動(宗教的諸活動——筆者加筆)は厳しく禁じられた。システムの命題どおり、若者に教会からの断絶と、社会主義的若者となり共産党当局の支配下におかれることを要求するイデオログたちが青年たちに権力を行使した⁽²⁶⁾。

確かに、1948年の統一労働者党成立以来、党と教会の関係は悪化し、1953～56年のヴィシンスキ首座大司教の逮捕・拘禁によりピークを迎えていた。クラクフでも、1949年初頭から、神父や神学生が行った軽犯罪(食品の闇販売など)が「体制転覆の資金準備」と説明されたり、殺人事件の犯人が「神父に教唆されたと自白した」などという「事件」が頻繁に報道され、多くの神父が逮捕されていった⁽²⁷⁾。1952年のクラクフ訴訟により、E. パジャク大司教も逮捕されることとなる(1956年まで拘禁される)。教会に通うことに恐怖を感じさせる党の言動は確かに存在した。また、一般紙での報道のみならず、事件を風刺したポスターが張り出されるなど、イメージに訴えることで、住民の気持ちを教会から引き離すような働きかけもあった。

ただ、ノヴァ・フタにおける、このような変化については、党の政策だけによるものとは断定できない。「市内電車でクラクフの喫茶店や映画館に通う」というような日曜日の過ごし方が若者の間で定着するなど⁽²⁸⁾、「党か教会か」という二分法では割り切れない、新しい生活スタイルが生み出されていたのも事実である。

b 司牧活動の定着——ビェンチツェ教区の成立——

そのような党による禁止・妨害・プロパガンダや、目に見えるライフスタイルの変容にも関わらず、ノヴァ・フタ地区では、近隣の各村落の修道院や聖堂などを拠点にミサやその他の活動は続けられていた。1952年6月14日⁽²⁹⁾、政府の許可を得ないまま、労働者向けのビェンチ

⁽²⁴⁾ Tamże, pp. 22–24.

⁽²⁵⁾ 後身である「シトー会聖ベルナルド普通科男子高等学校」の学校案内より。

⁽²⁶⁾ Karsznia, N.St., 1997, p. 19.

⁽²⁷⁾ Dziennik Polski, 14 lutego 1949, 2 marca 1949, itd.

もちろん、各事件について、事実と報道の間にどれほどの隔たりがあったのか、あるいはなかったのか、ということを精査するのは困難であるが、少なくとも、この時期に限って、連日、「神父の相次ぐ反政府活動」に関する報道がなされていたことは指摘出来るだろう。

⁽²⁸⁾ Budujemy Socjalizm, 16–17 lutego 1957.

⁽²⁹⁾ Archiwum Państwowe w Krakowie (以下 APK), Prezydium Miejskiej Rady Narodowej w Krakowie: Referat do Spraw Wyznań (以下 UMK: Wyzn) 154(1).

ツェ団地（Bieńczyce）の中に新たな小教区が設立された。戦前から残るマリアの幼な子修道会の聖堂が小教区教会となり、バジャク大司教が、小教区主任司祭に St. コシチェルニィを指名した。モギワの修道院とビェンチツェの聖堂では、戦後間もない時期からカリタスの活動が記録されている⁽³⁰⁾。特にビェンチツェでは当初、カリタスにより幼稚園が経営されるなど⁽³¹⁾、活発な活動が行われていた⁽³²⁾。

これらの聖堂は大変小さいものであり起立した状態でも 200 ～ 300 人も入れば満員であったが、「十月の春」による雪融け以前の 1955 年にも、常に人が戸外にあふれ出す状態でミサが行われていたことが記録されている⁽³³⁾。聖体節や諸聖人の日に行事を行うため、国民評議会に公道の使用許可を求める通信記録も残っているが⁽³⁴⁾、概ね許可されている（後に、1955 年 5 月 17 日の統一労働者党市委員会の会議では、行列が申し出通りのルートを通して、しかるべく行われていないことへの対策が議題に上ってはいるが、具体的な取締りの案などは出ていない⁽³⁵⁾）。不自由な環境での、このような宗教的实践の維持は、1955 年頃から本格化する新しい教会堂建設のための活動へとつながったと考えられる。

1955 年 11 月 2 日、国民評議会幹部会クラクフ市支部は、「ミサ参加者に比べて教会の数が不十分であるということと、新しい教会の建設をノヴァ・フタ住民が要求していることによって動機付けられた、クラクフ大司教区の嘆願」に回答を出すため、①教会の数、②ミサへの参加者数、③ノヴァ・フタ住民がクラクフ中心部の教会のミサに参加しているか、④教会建設に向けて、ノヴァ・フタ住民の間で具体的な試みがなされているか、の 4 点について、極秘に調査を進めるよう命じており⁽³⁶⁾、教条的に拒否する姿勢は取っていない。

c 教会と信徒のつながり

以上のように、この時期の党と教会の関係においては、スターリン期特有の暴力（身体の拘束）を伴う深刻な対立や、若者の価値観の変化の影響などもあり、教会にとっての社会背景は相対的に厳しかったと言うことは出来る。同時に、それにもかかわらず、多くの信者がミサに参列し、新しい小教区が設立されるなど、一定以上の活動が維持された面も指摘できる。そのような状況下で、この時期、ノヴァ・フタの社会において、教会は何を獲得したと言えるだろうか。

ある面で、ノヴァ・フタの新住民の「若さ」は、新しい価値や生活・労働様式の受容を容易にし、「流動性」「不安定さ」をはらんでいたと言うことが出来る。しかし、そのような「流動

⁽³⁰⁾ APK, Urząd Wojewódzki Krakowski (以下 UWK), 5/28/76/TJN

⁽³¹⁾ 1948 年 5 月 28 日の記録より。APK, UWK, 3/28/76/TJN

⁽³²⁾ カリタスの廃止は 1950 年 4 月 14 日に調印された [Protokół, Wspólnej komisji rządu Rzeczypospolitej Polskiej i Episkopatu Polski w Związku z zawartym porozumieniem] が、実際には幼稚園での宗教活動は続けられている。1954 年 2 月 5 日の国民評議会クラクフ市支部の記録では、「カリタス第 39 番幼稚園は廃止した方が良い」と記され、理由として、「ビェンチツェから通っている子供の中で、幼稚園で祈祷文を唱えるのを分かっているが、それを目的に通わせている親がいる」としている。一方で、内偵中「35 人通っているはずのビェンチツェ団地の園児たちの中で、たった 3 人しか祈祷会に来なかった」とも記されている。APK, UMK: Wyz 154(1).

⁽³³⁾ 例えば、1955 年 11 月 25 日付の政府の内偵の結果によると、モギワの修道院だけで毎日より 6 回行われるミサに、1 ～ 1.4 万人が参加していると記録されている（小教区民は 1.5 万人）。APK, UMK: Wyz 152.

⁽³⁴⁾ Tamże.

⁽³⁵⁾ APK, Komitet Miejski Polska Zjednoczona Partia Robotnicza (以下 PZPR) w Krakowie 45.

⁽³⁶⁾ APK, UMK: Wyz 154(1).

性」は、一度離れた価値への回帰をも容易にする可能性を残していたと言えるだろう。

ポーランドにおいて、習慣や暦とカトリックは密接に結びついているが、そのような行事は、家族や小教区を中心とした地域社会を核として行われる。このように、家族や地域を単位とした宗教的实践が、ポーランド人の信仰形態を生まれた時から規定し、宗教と日常生活を強固に結び合わせていると言える。特に、ノヴァ・フタの例においては若い夫婦が極端に多いという人口学的特徴から、子供の成長を通じて教会へと回帰するというライフ・サイクルに着目できる。当時、ノヴァ・フタの労働者用の団地もあったクラクフ市内のグジェグシュキ (Gorzegórzki) 小教区で司祭をしていた J. ティシュネル神父が、「私たちの小教区は、軍や民警の家族が多かった。大体において、小教区は田舎からクラクフに移住してきた人々によって出来ていた。小教区民の大部分が組織化しつつあるノーメンクラトゥーラだった。そのような人々とは全くコンタクトがなかった。彼らの子供が初聖体の準備を始めるまでは」と回想しているように⁽³⁷⁾、司祭が各小教区で司牧にあたる上で、カテキズムはそれを通じて社会と教会がつながっていくための最後の砦として、非常に大きな意味を持っていたと言える。

また、1957年には、ノヴァ・フタで最初の「世俗的な小学校」(「宗教科目を教えない学校」の意)が建設されたと報道されるが、開講当初は8学年で180人しか集まらない(予定されていた定員には100人不足)状況であり、地域の新聞に以下のような記事が掲載された。

B-33 地区の学校を、2つの理由から訪問した。理由は、まず第一に、これがノヴァ・フタで初めての世俗的な学校だからであり、第二に、学校が新築された建物の中にあるからである。(……)

残念ながら、ファナティックないくらかの住民が学校の周辺で敵意のこもった雰囲気をかもし出しているのと同じように、神父は教会の説教壇から、子供を世俗的な学校に送る両親は赦しを得ることが出来ないと脅しているのである⁽³⁸⁾。

一般に、教育は、イデオロギーを伝達する上で非常に大きな役割を果たすと言うことが出来る。実際に、このような「敵意」や「脅し」が一般的であったのかどうかは定かではないが、地元メディアがこのように報道し、また、教会側がカテキズムに司牧の活路を見出していたことから明らかなように、子供の教育が、党と教会の間で、1つの争点として形成されていたことはうかがい知ることが出来る。

実際、1953年2月9日に国民評議会によって出された「教会の聖職の任免についての法令 (Dekret o Obsadzeniu duchownych stanowisk kościelnych)」の後、クラクフ県でも徐々に宗教教育を行わない小学校のパーセンテージは上がり始めるが⁽³⁹⁾、同時に、神父による各家庭への訪問や、母親への宗教教育、チェンストホヴァへの遠足の企画など、司牧・教育のための新たな手法を見出していると、党からの指摘を受けている⁽⁴⁰⁾。

⁽³⁷⁾ Michnik, Adam & Józef Tischner & Jacek Żakowski, *Między Panem a Plebanem*, Kraków: Znak, 1995, pp. 87–88.

⁽³⁸⁾ Głos Nowej Huty, 23–25 września 1957. s.3.

⁽³⁹⁾ 党県支部によって1952年と1953年に実施された調査によると、クラクフ市の市部で宗教教育を行わない学校が占める割合は15.5%から22.5%へ、郡部で13.8%から15.8%へと増加しており、クラクフ県全体では8.2%から13.4%へと上昇している。APK, Komitet Wojewódzki PZPR, Informacje Wydziału dotyczące działalności kleru na terenie województwa, cz. 1.

⁽⁴⁰⁾ Tamże.

この時期を通じて、教会は、党による禁止や締め付けを潜り抜けながら、ノヴァ・フタという、いわば人工的に作られた社会において、家庭・家族とのつながりを持ち、諸個人の日常生活と深く関わって行く糸口をつかんだと言える。また、党が、公的空間から宗教を排除しようとしたことも、逆に、教会が、党からの相対的自律性を高める結果となったことを示唆したい。

3 まとめと展望

以上のように、本論は、1955年に刊行されたゴワシェフスキによる日誌・国家公文書館（クラクフ支部）の資料・神父の回想録などを元に、ノヴァ・フタにおけるカトリック教会と社会の有りようについて、分析を行って来た。当時のノヴァ・フタ住民は、党のプロパガンダや工場・都市の中で形成される価値、物質的な豊かさなどへの欲求、教会によって提示される価値、旧来から身体化された習慣など、いわば「首尾一貫しない」複数のイデオロギーが重なりあう中で生活していた。

もちろん、地理的・歴史的な特性の影響を考えれば、このノヴァ・フタの事例をポーランド全体に援用するのは早計であろう。例えば、この時期、南東部各県（キェルツェ、クラクフ、ジェシュフ）においては、西部各県（ポズナン、オボレ、シュチェチン）ほど、小学校からの宗教教育の追放は徹底されなかったとされる⁽⁴¹⁾など、地域による格差は大きかったと言えることが出来る。

しかし、この「首尾一貫しない」イデオロギーが重なり合う社会の姿は、当時の、他の東欧諸国との比較において、ポーランドの1つの特徴として強調出来るだろう。かねてより、社会主義ポーランドにおける社会状況の特殊性として、党が、個人農とカトリック教会という2つの「難敵」を抱え込んでいた点が挙げられて来た⁽⁴²⁾。しかし、これは、個人農とカトリック信徒が、党のイデオロギーとは異なるイデオロギーを振りかざし、党に激しく抵抗し続けるという「civic society」として立ちはだかっていたという意味ではない。ポーランドの社会において人々が有する価値は、明確に認識されたイデオロギーなどではなく、日々の生活に根ざし、ある部分ではすでに身体化されていたが故に、党にとっての「難敵」となったということを意味しているのである。

もちろん、党と教会の間では、価値の対立は随所に見て取ることが出来る。また、党による逮捕・投獄、活動禁止など、目に見える弾圧と、それに対する教会側の恭順・沈黙、あるいは激しい反発・抵抗もあり、特に1960年代以降、教会主導で、権利・活動領域の拡大を求めるための働きかけをおこすこともあった。しかし、時に激しい言説や暴力を用いた衝突を伴いつつも、基本的には、多くの人々は、どちらかに極端に傾くことの少ない日常性の中に留まるとしたならば、党の一元的支配下においても、家庭・教育・カテキズムなどを手がかりとして、日常レベルの社会生活の中に、自らの基盤を（再）確立することが出来た点が、民主化過程を

⁽⁴¹⁾ 1955-1956年度における宗教教育を行わない小学校の割合は、西部3県では全小学校の98.6～99.4%であるが、キェルツェでは61.7%、クラクフとジェシュフでは40%程度とされる。Gryz, Ryszard, *Państwo a Kościół w Polsce w 1945-1956 na Przykładzie Województwa Kieleckiego*, Kraków: NOMOS, 1999, pp. 349-360.

⁽⁴²⁾ 一例として、Diskin, Hanna, *The Seeds of Triumph*, 2001, Budapest: Central European University Press を挙げる。

長いスパンで見た際の、この時期の教会の活動の性質として重視出来るのではないかと考える。

（付記）本研究は、「科学研究費補助金／特別研究員奨励費」を得て行った研究の一部である。

（本論は複数レフェリーの審査を経て編集委員会が採択したものである。）